『第3次川神聖杯戦争』

山茶花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『第３次川神聖杯戦争』

【Ｎコード】
Ｎ７３３９Ｙ

【作者名】
山茶花

【あらすじ】
コラボ企画です。
この度は人数が集まりましたので晴れて投稿させていただきました。皆様に感謝の意を込めて、『第３次川神聖杯戦争』を始めたいと思います！！
参加者の方々へはさん付けさせてタグに登録させていただいております。

『3度目、開幕の時』

これはこの川神に都市伝説として存在する物語である……

まずは語られる、七の座から生まれ出でる英霊達。

1つは剣を持ち…そのまた1つは弓を番え…そして更なる1つは槍を振るう。

剣はセイバー。
弓はアーチャー。
槍はランサー。

これらは今までの聖杯戦争でも語り告がれる『三騎士』と呼ばれ、トップクラスの戦力を誇るサーヴァントである。

特にセイバーは最優と呼ばれていて呼ぼうとするものたちはそのクラスを呼ぶことを強く望んだ。

それ以外にも暗殺者(アサシン)のサーヴァント、魔術師(キャスター)のサーヴァントというものも有る。

また騎乗兵(ライダー)と狂戦士(バーサーカー)のサーヴァントが有る。

なおバーサーカーはデメリットは大きいがその分強く、セイバーの『最優』と並び『最強』と呼ばれている。

それ以外のサーヴァントの特徴は……

アーチャーが『単独行動』のスキルを持ちマスター不在でも動く事ができる。
ランサーは『最速』のサーヴァントと呼ばれ、敏捷において他の追随を許さない。
アサシンは『気配遮断』のスキルを持ち、隠密行動や不意打ちに非常に向いている。
キャスターは類まれなる魔力や魔術、魔眼をもってして戦う後方型である。
ライダーは強力な宝具を用いて戦い、機動能力に優れている。

これらのサーヴァントを争わせていく事で己の理想をかなえる『聖杯』を奪う戦争の事を『聖杯戦争』と言う。
そして舞台が川神であったために頭に川神をつけて『川神聖杯戦争』と言われるようになった。

かつて2度、この戦いは行われた。

誰も彼も十分聖杯を争うにふさわしい存在を傍らに縦横無尽に駆け回った。
しかしふさわしい存在たちは誰もがとてつもない力を所持していた。
その為、この2回の聖杯戦争は川神をいつも以上に激闘の地へと変えた。

しかしその激闘による勝者を誰も知らない。

そして何よりこれほどの激闘があったというのに、外部の人間は感知できていなかった。
その為、この『川神聖杯戦争』を眉唾物と考える人も居た。

しかし真実は形としてあった、この川神の誰にも知られぬ場所で静

かに光る聖杯がある。
それはかの円卓の騎士が追い求めたものとは違うが紛れもない本物であった。

そして今もう一度その戦いが行われようとしている。

その始まりはある神父がある男に依頼したからだ。
この川神の何処かに眠る聖杯の調査。
そして二度に渡る聖杯戦争の結末をその聖杯から手に入れる事。
しかし神父はどこか笑みを浮かべていた、この調査には興味津々だと言わんばかりに。
どのような結末になるのか、その神父が言ったのはその戦いにおける監督役。
つまりどんな状況であろうと事の顛末を見届けるものとなる。
だがこの調査に参加できるのはその参加の証となる令呪を浮かべた者だけ。
しかも調査と言えば聞こえは良いが早い話殺し合いにも発展するような状況なのだ。
でも願いが叶う可能性が有るのだから誰もがこの戦いへは望もうとする。

しかし今度は全員が何を思ったのか本命……すなわち強力なサーヴァントを呼ぶことをためらっている。
2番手のサーヴァント…もしくは有る特殊な面に特化したものを呼ぼうとしていた。
ただ一部のマスターは勝つために、本命を呼べる触媒を持っていたが……

そして深夜……その参加者の誰もが召喚のための触媒をもち己の描いた召喚陣の上に立つ。

ある者は紅茶のカップを触媒に…

「雨の如く乱れ撃て、汝は射手の者、ここに推参するは任務を成し遂げし者、ここに聖杯を運ぶ者、ここで願いをかなえるとき傍らに付き従う者、主は眼前で汝を待つ」

ある者は何かしらの証のようなバッジを触媒に…

「汝は最速の者、汝は確実に堅実に闘い、汝は尖兵として、ここに現れよ、沢山の慕い人を仕える槍兵なり、汝よ、主の下へはせ参じて候」

ある者は一本の白髪を触媒に…

「隠れ蓑に潜みて首を狩り、毒の蔵にて昏倒させ、森の中で木を装うように、汝は隠蔽と殺しの存在である、汝は姿を暗闇に隠す者、しかし汝は私の前に、今宵月光の元に訪れる！！」

ある者は女性物のメガネを触媒に…

「汝は騎乗兵であって騎乗兵にあらじ、騎乗する事を汝は望まず、汝は騎乗される事に愉悦を感じる者である、汝よ、今ココに、俺様の前に、現れてくれ！！」

ある者は白いスーツを触媒に…

「最優の称号の証はここへ、ここに呼ばれるのは私の願いを叶える天秤の担い手、ここに有るべきは騎士の姿よ、汝は主を女王として見てここに現れな！！」

ある者は喫茶店の制服を触媒に…

「魔たる術を用いて汝は魅了する、無礼の態度で汝は逆撫でをする、汝は作らずの魔術師、汝は我を主として見る、自由たる魔術師よ、現れろ！！」

ある者はドイツ軍の軍服を触媒に…

「汝は獣。檻では縛れない、閉じ込められない。汝は心が優しい錠でつながれている、服は錠を解く鍵、その解放と共に狂乱の宴を！！、ここに出でよ、狂戦士よ！」

そして全ての召喚陣が一斉に発光する。
詠唱の速度としては全くの同時であった為、適正などの優劣によって決まるであろう。

「問おう、汝が私の」

あるサーヴァントは礼儀正しく

「問うぜ、テメェが俺の」

あるサーヴァントは乱暴に

『マスターか』

この眼前の存在が己の主かを確かめた。

そしてこの瞬間3度目の川神を舞台にした聖杯戦争が始まる。

『3度目、開幕の時』（後書き）

開幕のプロローグです。

『行動開始』（前書き）

とりあえず自己紹介の話を。

『行動開始』

7人のマスターが全てサーヴァントの召喚に成功する。
マスター達は息を呑む、無理もない。
本命であろうがあるまいがサーヴァントとは一騎当千のつわもの達である。
平行世界でもそれは例外でない。

問いかけに答えるマスター、しかし全員が全員礼儀に対して礼儀を返すと言うわけではなかった。

「あぁ、俺がテメェのマスターの板垣竜兵だ、覚えておけよ、とりあえずは宜しくだ」
「僕の名前は師岡卓也、君のマスターだよ、よろしくね」
「俺様の名前は島津岳人、女性のサーヴァントでよかったぜ、よろしくな」
「俺の名前は井上準だ、分かったか?、礼儀が悪いとしても、まぁ、よろしく頼むぞ」
「俺の名前は……まぁ、総理とでも呼んでくれや、よろしくな、嬢ちゃん」
「あたいがお前のマスターさ、豚みたいだけど良いかもねぇ、よろしく頼むよ」
「私の名前は矢場弓子、宜しくで候」

「よろしくされました、ご主人様♪」

メイドのような服を着たサーヴァントはわざとらしく頭を下げていた、しかも名前を呼ぶ事も無く。
この動作を何度か繰り返していたら竜兵は名前を呼ばないから怒る

だろう、しかしこれは彼女の計算である事を竜兵は知らないのだった。

「宜しくお願いします、主」

マスターの名乗りに対して恭しく頭を下げるサーヴァント、相性だけ見るとなんだか良いのかもしれない。

「宜しくお願いしますねー、ガクトさん」

こちらはこちらで、主と従者と言うよりは女友達と男友達のような気さくな感じの雰囲気である。

「すまんな、その仏に出家したみてぇな頭見たら礼儀も何も吹っ飛んだわ、ハゲ」

笑い飛ばすように無礼な事を言うサーヴァント。
こんな奴でも呼んだ以上はまかなわないといけないんだよな、頭痛いぜ。

「総理って……まぁ、その、宜しくお願いします、マスター」

平行世界と言えど現代の知識は持っている、故に総理と聞いてこのサーヴァントは畏まった喋り方になっていたのであった。

「豚とは失礼な……ただ、動けない肥満なだけなのですが……まぁ、良いでしょう」

白いスーツを着たサーヴァントは罵倒を受けていると言うのに涼しげで有る。

そしてこのサーヴァントは不吉な笑みを浮かべて楽しそうにしていた。

「お願いしますね、私は……まだ真名を明かすには早すぎるのでひとまずランサーと言ってください、マイマスター」

全面に笑いを押し出したかのような笑顔で自己紹介をしていた。
そしてその様な笑顔でマスターに話しかける少女はランサーのサーヴァントであった。

そしてその頃宇佐美代行センターでは……

「どうだ、忠勝、確認できたか？」
「あぁ、オヤジ、どうやら全員が召喚に成功したみたいだ」
「なら、ここからがオジサンの仕事だ、監督役に恥じないよう頑張らないとな」
「マスターに一子がいねぇだけマシか……あいつにはこんな戦争を見せたくはねぇ」

宇佐美巨人と源忠勝は迅速な対応の為、普段の事務所を片付けた後、ここを『川神聖杯戦争』の集合の場所、ルール説明での場所へと模様替えをした。

「これで良いんですかね、言峰神父」

どこにいるかも分からぬ男に…宇佐美巨人は空を見上げて呟いた。

さらに別の場所の教会では……

「どうやら七騎、全てのサーヴァントの召喚が確認されたようだな」

「ほう、言峰、貴様何か企んでいるのか？」
「何、少し別物の聖杯をな、都合していたのだ」
「別物の聖杯だと？」
「そうだ、かつての円卓の騎士が求めたものではない、しかし決して紛い物ではない聖杯だ、諸説と言うものがあり決して聖杯は一つではないのだ」
「成る程、しかしその聖杯戦争にでる奴らは何か呪いにでもかかっているのか？」
「何が言いたいのだ？」
「どいつもこいつもその地ゆかりではないか、全く…我(おれ)が求める奴には会えぬ」

黄金のフルプレートを纏う男はこの状況を残念そうに呟いていた。

そして舞台は再び川神へ……

竜兵＆ａｍｐ；？組

「で……どうするんですか、ご主人様？」
「俺の名前は板垣竜兵だって言っただろうが！！、本拠地はどっかの公園のベンチでも良いだろうが、亜巳姉とかがマスターだったらやべぇからな」
「ほほう、ご主人様はどうやら勝ちを狙っているようですね、でもそれでは危ないですよ」
「あぁ！？」
「だってアーチャーなどの狙撃には広い場所は危ないです、それなら何処かのアパートかカプセルホテルの方が余程大丈夫だと思いますよ」
「成る程な、しかしカプセルホテルは微妙だろ」
「かと言って短期間アパートを借りるにしても敷金礼金が……」

「って、随分テメェ、現代知識知ってんだな」
「それはだって、聖杯の知識ですからね、知ってておかしくないですよ」
「そうかよ……とりあえず、本拠地作るか、そしてそのついでに参加表明だな」
そう言ってとりあえず板垣竜兵は家以外の本拠地を作る事にした。
モロ&?組
「僕の本拠地は自宅だけど……島津寮って所があるんだ」
「主はそこに?」
「うん、例え敵がいても君の気配遮断で寝首をかく、当然マスターの方にだけど」
「しかし友人かもしれないのですよ?」
「だからだよ、僕は願いがないし、友人の願いが、悪い願いと言うか邪な願いなら……止めてあげないとね」
「なるほど」
「同盟を組んでさ、最後に後ろからやっても勝ちは勝ちなんだからね、さて、行こうか。深夜だからね、参加表明は明日さ」
少しでも勝率を上げるために師岡卓也は牙を隠して友の懐へ忍び込む事にした。
ガクト&?組
「とりあえず俺様は本拠地があるからそこに行く」
「ガクトさんは何か願いは有りますか?」
「考えているが流石の俺様も女を聖杯って奴で欲しくはねぇから、今のところは無しだな」

「そういう私は今の所は秘密です」
「そうか、まぁ、気が向いたら俺様に教えてくれ！！」
「はい、約束しますよ、ガクトさん」
「後は表明だが……これは明日で良いだろ」

主と従者とはいえないが二人は一応、腰を落ち着ける場所へと向かっていた。

準&?組

「とりあえず、俺の家で待機しつつ、機を見つつで良いな？」
「OK、イエス、マイロード」
「お前、本当に敬う気ねーのな、良いけどさ、俺、紳士だし」
「で、これからどうする気なんだ、マスター？」
「改めて参加の表明を監督役に報告する」
「何でだ、参加は全員表明した上で俺たちサーヴァントを召喚したんだろう？」
「確かに言うとおりだ。でもな召喚したとしても参加意思は改めてやらないといけない。なぜなら参加しないって言われて、一騎当千の奴らを野放しにされたらたまったものじゃあないだろ」
「でも、最悪鉢合わせの可能性があるぜ？」
「それでも即日に行っておいた方が良い、その後日、自分たちが後ろからなら問題ないんだ、こちらも知恵を振り絞るのさ」

そう言って主が頭の横をとんとんと指で叩く、様になっていた。
そして二人は宇佐美代行センターへと向かっていった。

矢場&?組

「私たちの本拠地は自宅で候」

「あの……マスター？」
「何で候？」
「その話し方面倒じゃあないですか？」
「私は……」
「普段どおりで良いと思いますよ、家にいる時とかと同じ様に、マスター」
「そうね、そうさせてもらうわ」
「で目的はどうします？」
「先にもう参加表明にいく、それで良いんじゃないかな」

そう言って歩き始める矢場とサーヴァント。
この時点で3騎のサーヴァントが宇佐美代行センターへと向かっていく事となった。

亜巳＆ａｍｐ；？組

「とりあえず本拠地は自宅で良いね」
「慣れ親しんだ所が一番ではありますね」
「許可なく喋ってんじゃあないよ、豚のくせに」
「ただの肥満だと言っていますがね、豚ではない」
「動くのが遅いんだよ、速く家の方に行くんだから、霊体化でもしてついてきなよ」
「分かりましたよ、ついて行かせて頂きますとも、主」

そう言って俯きながらついていくサーヴァント。
しかしその俯いた顔には不気味な笑みが張り付いていた。

総理＆ａｍｐ；？組

「嬢ちゃん、今から借りる所は礼儀がしっかりしてないとダメだ。

いけるかい？」
「礼儀ぐらいはちゃんと出来ますよ、それに出来なければ霊体化します」
「それでも良いけどやっぱり食ったりしたほうが良いだろうと思ってな」
「有難うございます」
「畏まらなくたって良いんだぜ、お互い、仲良く。ほのぼのと勝ちにいこうじゃあねえか」
「ハイ！！」
「それにしても願いをかなえるって……そんなもんが有るんだな」

全ての召喚、そして行動の開始。
川神聖杯戦争、ファーストバトルおよびファーストコンタクトは誰と誰なのか。
まだ初日、勝利を狙うならばまだしも、勝利の確信にはまだ速く。
全てのサーヴァントのクラスは隠されている。
召喚時の言葉が届いてるのならまだしも誰も彼も戦わないからまだ確信は持てず。
争いの火種はどこで起こるのか、それはまだ誰も知らない。

『行動開始』（後書き）

次回は戦闘を書く予定です。

『挑発』（前書き）

今回は戦闘が入っています。

『挑発』

竜兵＆ａｍｐ；？組

「とりあえずはここを本拠地候補にしておくか……」
「ご主人様、ここは？」
「監督役のお膝元って奴だ、これなら楽に立ち回れんだろ」
「なるほど、理解しました」
「と言うかその薄笑いどうにかならねぇのかよ？」
「これは職業上のものなので、申し訳有りません」

こう入っているが薄笑いのせいでどこか薄っぺらい謝罪である、それとも主導権を握る為に逆なでしているのだろうか？

「とりあえずは今日はどこかのネットカフェ……か？、ああいった所に泊まるぞ」
「お金は大丈夫ですか？」
「そこは亜巳姉のおかげでな、それにここは無法地帯だ、拳使えば一発だろ」
「正当に借りる気は？」
「全く無しだ、そんなもん面倒だろ」
「それもそうですね。で目的地は一体どこにあるんですか？」
「もう少しだな、一番乗りじゃあないかもしれないけどな」

そう言って宇佐美代行センターへと歩を進める2人、そこへ一番に到達したのは……

矢場と矢場のサーヴァントであった。

矢場&ｍｐ;？組

「つまりお前らは参加な訳ね？」
「はい」
「で、まずそいつは何のサーヴァント？」
「えっと、その…ランサーです」
「成る程、ランサーね」
「はい、私はランサーのサーヴァントです」
「ランサーと矢場は参加で良いんだな？」
「はい、参加です、頼れると、信頼していますので」

そう、矢場が言うとランサーのサーヴァントは胸を張る。
サーヴァントの中でも最高峰と言われる『三騎士』の一人、『最速』のサーヴァントが味方なのだ。
これは大きなアドバンテージとなる、対魔力をもっているおかげで魔術への対抗ができる。
さらに速度で他のサーヴァントを寄せ付けずにヒット&ｍｐ;アウェイを取れば時間はかかるが勝利する可能性が有る、聖杯の取得が現実味を帯びてきた。

「まぁ、相手さんが誰も彼も正攻法で来るとは限らないんで、気をつけましょうね」
「わかったわ」

そう言って扉に近づく、しかしこの時から話し声が聞こえていてなおかつ根性が悪い奴ならどうする？
扉の前で待つでしょう。
そしてランサー達がドアノブを捻ろうとした瞬間に……

ドガァン！！！

ドアの向こうに居る奴は矢場ごと吹き飛ばすようにドアを蹴りでぶち抜いた。
しかしそこは最速のサーヴァント、しっかりと庇って後ろへと下がっていた。

「チッ」

ドアの向こうで舌打ちをしたのは……

井上のサーヴァントであった。

準&ｐ;?組

「おいおい……参加確定でもこれはないだろ？」
「スキルが俺にドアをぶち抜けと囁いたからな」
「いきなり開戦かと思うと、心臓に悪いぜ」
「残念だが今日は撤退するで候」

そう言って矢場先輩は撤退をする、しかしドアをぶち抜いたのを庇ったサーヴァント。
あいつの敏捷性は非常に高い。

「いきなりペナルティでも喰らいたいのか、お前らは？」
「いや、コイツが勝つ為にはって言いましてね」
「しかし止めなかったお前も同じだろ」
「とりあえずお前らは参加で良いのね、おじさんも速く寝ないとヤバイし」
「はい、参加です」
「じゃあ、サーヴァントのクラスは？」

「バーサーカーです」
「お前、何自分で言ってんだよぉ！？」
「だって知らないだろ？」
「流石の俺も武器も使わず一撃でドアぶち抜いた時点で確信になったわ」
「じゃあ、井上とバーサーカーは参加だな」

準は少しばかり疑問に思っていた、召喚時に服をキーワードとしたからなのか目の前にいるサーヴァントはバーサーカーであるにもかかわらず狂っていない。
狂っていないという事は普通のサーヴァントと同じ様に魔力供給でのデメリットがなくなる。
これによって元より懸念される『自滅』の可能性は格段に減った。
ただ思うのは…『宝具』による開放だったら？
と言っても服ぐらいしか思い当たる節はない。
つまり本当の『狂戦士』は『奥の手』である。
使いどころさえ間違わなければとんでもない『切り札』となる。

「用は済んだ、帰るぞ」
「分かった、しかし……出るのはさっきのサーヴァントと同じく窓からだ」
「なっ、えっ！！？」

そう言ってバーサーカーは俺を抱えて飛び降りる、降りていく最中に見えたがあれは、サーヴァントと竜兵！？

竜兵＆ａｍｐ；？組

「なんか酷い事になってるな」
「そうですね、ご主人様」

「ドア自体は蝶番とかで何とかなるから良いけど、お前らも参加表明？」
「あぁ、その通りだ」
「で、クラスは？」
「私はキャスターですよ、おじ様♪」
「……なるほど、キャスターと竜兵が参加ね」
「何で主は頭を抱えているんですか？」

キャスターが言うように傍らでは竜兵が頭を抱える。
まぁ、サーヴァントは出来れば強い奴を望むが……
召喚した存在は幾らなんでも妥協できるものじゃあなかったのである。

「だってお前、キャスターって言ったら『最弱』じゃねぇか」
「それは正規でのキャスターで色物だったらどうか分かりませんよ？」
「何で疑問なんだよ……とりあえず、その…横取り戦法で行くから戦うのは基本的に無しだぞ」
「はい、確かに『聞きました』よ」

笑みを浮かべて答えるキャスター、といっても含みがあって本当の笑顔かどうかは怪しいのだが。

そして去っていく、しかしこの戦いで参加を言ったのは今で3人。
後の4人は同盟か何かしらのアクションを起こすだろう。

そして別に参加意思を言う前に攻撃したバーサーカーのように闇夜に隠れて戦うものもいる。
カラスが鳴くよりも速く、食事を済ませた総理とサーヴァントがあるサーヴァントを追っていた。

総理＆ａｍｐ；？組

「で、狙うのは……最優のサーヴァントって訳か？」
「はい、マスターは敵のマスターを狙ってください、サーヴァントは私がどうにかします」
「じゃあ、始めるか」

そう言って銃弾を銃に込める、長距離による狙撃を波状攻撃のように仕掛ける為に。
狙いは遠くにいる白いスーツで肥満体型の男性。
雰囲気が尋常ではない、こちらがサーヴァントであろう。
剣を下げているから『セイバー』に間違いはないのだろうが、あの体型では早くは動けないだろう。
故に一発のヘッドショットで終わらせる、この静寂を乱さぬように、即座に撃ち抜く。
ライフルを構えて呼吸を整える、スコープを覗く。
頭が入ったことを確認、そして……
引き鉄を引く！！！

弾丸は狙い通りの方向、そのまま行けば確実に仕留められる。
後ろからならば『最優』といえどたやすい……
しかし目に飛び込んできたのはそんな甘さを吹き飛ばす光景だった。

「なっ！？」

最優のサーヴァントであるセイバーに恥じぬ剣捌きで弾丸を切り落としていた。
しかしそれ以上に驚いたのはあの体型では動きが鈍いと言う考えを打ち破った事だ。

あの体型はただのフェイクなのか？
敵を欺く為の手をもう早くも打っていたのか？

亜巳&？組

「やれやれ……クラスが分かられたかな？」
「へぇ、ちゃんと動けるんじゃないか」
「流石に命の危険が有るときぐらいは動きますよ、普段は動けないのですが」
「ふん、動かないだけじゃあないのかい？」
「買いかぶりすぎと言うものです、さて……撃ち方から感じられるのはまだ若々しい女性かな、どうやら、教えてあげないといけないようですね」
「やる気かい？」
「少し若い女性には早々とご撤退を願いましょうか、家へ向かう途中でしたし」

参加意思の表明をせずにここでは知られる事のない闘争が始まろうとしていた。

竜兵&キャスター組　VS　準&バーサーカー組

「って、なんでテメェは戦おうとしてんだよ！！？」
「だって、私は『聞いた』だけで言うとおりにするとは言ってませんからね♪」

そう言ってキャスターは向かっていく、標的は俺たちより先に参加表明をしたであろうサーヴァント。

「言う事を聞けよ……まったく」

竜兵があきれたように言う、こちらにも悲願ぐらいはあるだろう。
そのためには『最弱』でも上手く戦わなくてはならないと言うのが条件だろうに。

そして気配を感じたのか相手のサーヴァントが振り向く。
どうやら良い男の様だが、傍らにいるのはハゲではないか、珍しい。

「お前がこのハゲのサーヴァントか？」
「その通りだぜ、板垣竜兵」
「お前、竜兵と知り合いなのか？」
「あぁ、俺達サーヴァントがどこから召喚されるのかがミソだ」
「何？」
「そこのサーヴァントも俺もここではない『パラレルワールド』…『平行世界』から呼ばれているんだ、知ってる奴も居れば知らない奴もいる」
「成る程な、それなら知っていても問題ないな」
「訳わからねぇ説明だな……」
「ご主人様、ちゃんとその足りない頭で考えてくださいね♪」
「うるせぇ！！」

サーヴァントが可愛い？と言うか黒い笑顔で竜兵を罵倒する。
このサーヴァントって可愛かったら許してもらえると思っているタイプか？
まぁ、年下じゃあないみたいだから容赦なく殴れるけどな。
バーサーカーも指バキバキ鳴らしやがって、どうやら戦闘態勢の方はＯＫのようだぜ。

「おやおや、指を鳴らして……そこのサーヴァントは女を相手でも容赦ないってＤＶの気がある（け）んですかね」

その様子を見て俺とバーサーカーにそんな言葉を投げつける。
まぁ、俺には罵倒なんぞ通用しないぜ。

「いやいや、勝負には全力だろ、普通ならよ」

バーサーカーも口元をぴくぴくさせながらも言葉に応じる。
どうもこの手の言葉には弱いようだな。

「そんな事言って実は首を絞めなきゃ興奮できない変態さんなのでは？」

むかつくほどの笑顔でバーサーカーにそんな事をのたまうサーヴァント。
しかも明らかにぶりっ子したような目である。

「マスター……」
「何だ？」
「コイツ……ぶん殴っても良いっすか？」
「いやいや、いきなりはダメだろ」
「じゃあ、事前に聞いたらＯＫか？」
「いや、待て。なんでそうなる」
「だって言われもない事言われて、ない様な性癖言われて、むかつくだろ……」

狂ってはいないが青筋を立てて完全に怒っている。
うん、流石にあのぶりっ子の罵倒を浴びていたからか。

「きゃー、こわーい」

また平然とかわいこぶってそんな事を言う。
明らかにそんな事は考えていないであろう顔をしながらだ。
流石にバーサーカーもその態度には怒りが臨界点を突破した。

「死……ね」

そう言って殺意を持って駆け出すバーサーカー、今ここに聖杯戦争の初戦が始まった。

一撃を当てる為に踏み込むバーサーカー。
それを上回る速度で後ろをとりに行くキャスター。

敏捷性においてはキャスターが上である、と言っても狂戦士が魔術師に負ける自体おかしいのだが。

準は一目見て動きでわかった。
やはり召喚の言葉の際に宝具式での狂化スキル開放にしている。
そのせいで普通の状態では弱いのだ。
それも殆どキャスターやアサシンと変わらないほどに低下している。
魔力供給を強くしてもこの状況は変わらないであろう、かといっていきなり本領発揮とは行かない。

それにたかだか一度後ろを取られた程度で、心配するのは信頼していない証拠だ。
一日とはいえ主と言ってくれている、もし危なくなれば俺が竜兵を倒せば良い。
だから俺はお前を見届ける。

「シィア！！！」
「残念ですね、遅いですよ♪」

そう言って拳を突き出すキャスター。
その拳はほんの僅かとはいえバーサーカーを掠める。
キャスターのサーヴァントが魔力ではない肉弾戦のタイプとは……
珍しい。

「チッ！！！」
「ホラホラ、こっちですよ」
「くそが……うろちょろしてんじゃあねぇぞ、この女がぁ！！！！！！」
「頭に血を上らせたらせっかくの良い顔も台無しですよ、まぁ、そんなに元から良い顔じゃ有りませんけど♪」
「やっぱり……テメェは死ね」

そう言ってバーサーカーは突っ込む。
さっきのように踏み込むのではなくただの直進、完全に喧嘩のやり方である。
頭に血が上っているんだろう、残念だが令呪で撤退した方が良いか？

「ざんね……えっ！？」
「DVな奴って言ったのはテメェだ、足踏んでも文句はねぇよなあ……」

足を踏んで遠ざからせない、小技を使い始めるとは…狂ってないから出来る事だな

「くっ！？」
「得意のぶりっ子はどうしたんだよ、それても踏まれて興奮するマゾなのか？」

今までの仕返しといわんばかりに言葉を浴びせるバーサーカー。
いつの間にか青筋も無くなりしてやったりの笑顔が張り付いていた。

「さてと……」
「ようやく……って、えっ？」

足を離した一瞬の間に大きく踏み込んで距離を詰める、そして遂に……

「ようやくファーストヒットだぜ！！！」

一撃を放つ、その攻撃は後ろに下がるキャスターを僅かに捕らえて……

「きゃあ！？」
「吹っ飛ぶ時まで可愛さアピールとは……鏡ですねぇ」

吹き飛ばしていった、しかしさすがは一騎当千の猛者である、平然と立ち上がりバーサーカーを見たまま不敵に笑い、聞こえないほどの声でこう呟いた。

「もう覚えました」と……

そして近づくキャスター……
今、この夜においての第2ラウンドが始まった。

『挑発』（後書き）

まだまだキャスター戦は続きます。
というかバーサーカーも沸点が低いですが、相手を手玉に取るとやっぱり言葉とは言えど仕返ししたくなりますよね。

『宝具開放』（前書き）

戦闘の話です。

『宝具開放』

亜巳&?組

私とこの豚のようなサーヴァントは、狙撃地点を最初の一撃で見当をつけたためにそちらへと向かう。
相手のサーヴァントはその際に幾度となく狙撃をするが、残念ながら動いている標的に当てるのは想像以上に難しい。
私のサーヴァントは狙撃地点の周りをじっくりと穴が開くほど見た後に呟く。

「そんな所に隠れるのは野暮だよ、お嬢さん」
「ばれるものなのね、さすがは『最優』」
「いやいや、そんな称号で私への評価を過大な物にしないで欲しいな」
「しかしゼロ距離で撃たれたらどうなるのかな?」
「残念だが言葉を紡ぐ方がはるかに早い、私の戯言に付き合う気ならまだしも、付き合わないのならば今日の所は撤退した方が良い」
「残念だが退く気はない」
「ならば……仕方ないな、試運転には丁度良い」

そう言って息を吸い込むサーヴァント、一体何をする気なのかね?

「私の話を聞きなさい」
「なっ!、ふざけるな!!?」

息を吸ったにしては大きな声ではないが頭の中に響くような声。
そう言った後に相手のサーヴァントに近寄る、そして狙撃地点の奥

へと入っていった。

それから数分後…出て来た相手のサーヴァントは目がうつろであった。

「今日は退きなさい、良いね？」

「ハイ、ワカリマシタ」

そう言って素直に去っていく相手のサーヴァント、これは催眠術の一種だろうか？

「どうやら捨てたものでもないようだな、まぁ、真名開放をしていないから少しすれば解けるだろう」

「あんた何したんだい？」

「只の話術ですよ」

そう言って笑顔を見せる私のサーヴァント。

まぁ、一応これでも手柄は手柄なので罵倒はしないでおこうか。

「マスター、一応情報です」

「何なんだい？」

「あのサーヴァントはアーチャーで現在は交戦無し、つまりファーストコンタクトが私たちです」

「へぇ、相手がペラペラ喋ったのかい」

「それが私の力ですので。お気になさらず、信憑性は高いですよ」

「まぁ、信じといてやるよ、さて、家に戻るんだ、また速く歩きな！！」

「全く人使いが荒いマスターだ」

そう言って私は自分のサーヴァントと歩き始める。

この戦いにおいて話術の上手さは思いのほか強さに繋がる。
予期せずして板垣亜巳のサーヴァントはこの戦いにとって、とてつもないアドバンテージをマスターに見せる結果になったのだった。
竜兵&キャスター組　VS　準&バーサーカー組
「近づいても間合いってもんがあるだろうが！！」
俺は近づいてきたサーヴァントにさっきと同じ技を使う、同じ直撃コースだ。
しかしサーヴァントの奴はおかしな動きを見せた。
紙一重の所で避けてクロスカウンターを入れる、それも人中、人間の急所だ。
痛みが走る中で考える、一体何が有ったのだろうか？
幾らなんでもこの状況は不思議だ。
もしかして宝具の類か、学習するとかいった奴なら性質が悪いな、それとも別のタイプか？
そして俺はキャスターにさっきと同じ技をそれからさらに2回放つが、どれもカウンターされて顎と腹に攻撃が入る。
「くそっ！！、当たらなくなりやがった！」
バーサーカーの奴は一度キャスターを吹き飛ばしてから攻撃を当てる事ができなくなってしまっていた。
耐久のステータスが低いくせに良くカウンターを何発を耐えられるものだ、そこは驚く。
「足を踏むことは出来ませんから、もう攻撃は当たりませんよ？」

「足を踏むことが全てじゃあないんだよ、分かったか？。年増のくせにこんな所までそんな格好してんじゃあねえよ、バーカ、バーカ！！」
「乙女に向かって失礼っ、な！！」

そんな事を考えていたらバーサーカーの奴が相手のサーヴァントを罵倒する。
相手のサーヴァントがそれを聞いて怒ったのか、思いっきり勢いつけた踵落としを振り下ろす。
流石にサーヴァントといえど女性相手に年の話はＮＧワードか。
まあ、俺も年上っぽいから興味ないけど。
そしてバーサーカーはその踵落としを避ける。
今のを喰らっていたらやばかったな。

「残念、避ける」
「しかしその動きに合わせて、レバーブローです♪」
「ぐあっ！？」

避けた方向を読まれてバーサーカーの奴が脇腹に攻撃を喰らう。
しかしバーサーカーの奴は間一髪腕を交差して軽減する、と言うかもういっその事宝具を使え。
相手が使っている可能性もあるんだから、もしくは俺が言って使わせるか？

「さて……まだ使っていない技もあるし、そして何より、こっちもお前の動きは多少見切った」
「んっ、強がりですか？」
「いいや、少しぐらいは楽しまないとな、こんな機会なんて一度あるかないか、即座に撤退されてもしてもつまらないだろう」
「へぇ、計算ずくだったわけですか」

「さあ、ここからは俺にとっての第２Ｒだ」

そう言ってバーサーカーが一気に距離を取る、相手が追いつく。
キャスターなのに敏捷のステータスが異常なんだよな、追撃させないようにしたいのにろくに出来ないのは面倒だ。
それにさっきまでのダメージの影響でバランスが揺らいでいる。

攻撃を放つ。踏み出しの重心が僅かに傾く。
そしてその方向と逆方向へキャスターが進んでがら空きの場所に一撃を入れる。

幾ら攻撃面に乏しいキャスターといえど、何度も何度も攻撃を命中させていたらその分ダメージは蓄積される。

現にバーサーカーの奴は少しふらついている、気合を入れているがどうも良い方に事は運ばない。

どうにかするには令呪だ、この状況を帰る最高にして最悪の一手。
最初の戦いで使うのは早すぎる、しかしこの状況は確実に切り抜けられる。
しかしバーサーカーの奴が俺に向かって手を突き出してそれを制した。

「マスター、令呪は良い……切り抜けるさ」
「あっ？」

そう言ってバーサーカーの奴は構えて息を吸い込む、何をする気だ。

「……」

無言のまま息を吐き出さずに攻撃をするバーサーカー。
今までの焼き直しのように再びキャスターがカウンターを放つ。
しかし次の瞬間、準やバーサーカー、そして竜兵の目の前に有ったのはさっきまでとは違う光景だった。

「フッ！！」

俺は息を吐き出して体が僅かに沈ませた後、相手の攻撃を弾き返す。
この感覚…どうやら成功のようだな。
相手のサーヴァントは驚いた顔をしている。

「キャッ！？」

俺が見たのは尻餅をつく相手のサーヴァント、一体バーサーカーの奴…何をしたんだ？

「成功したな、これで時間は有る……」

俺は成功した事に安堵の息を吐く。
この種明かしは発勁(はっけい)である。
硬気功で耐えても良いが、尻餅の方があいつのプライドに傷を付けられるだろう。
どうやらマスターも驚いたようだ。

「全く、女性を転ばせるなんてデリカシーのない人ですね……」
「都合悪い時に慇懃無礼やめても無駄だっての、準備は良いか？」
「こっちは立ち上がってもないのに……無抵抗な人に暴力振るうんですか？」
「俺はそんな趣味はないし、勝負事にそんな事は持ち込まない主義

だっての。さて、マスター！！」
「何だ？」
「宝具開放しても良いか？」
「あぁ、ＯＫだ、思う存分やっちまえ！！！」
「というわけだ、この隙に立ち上がったようだが覚悟は良いな、キャスター……」

そして初戦にして宝具の開放を決める。
この戦いに一時的な終止符を打つために、俺は宝具を放つための構えを取った。

『宝具開放』（後書き）

一応ステータスという単語が出たので書いておきます。

キャスター

筋力：E　敏捷：B　幸運：A＋　耐久：E　魔力：E　宝具：B

バーサーカー

筋力：D　敏捷：E　幸運：A＋＋　耐久：E　魔力：C　宝具：A

狂化時

筋力：A　敏捷：C　幸運：A＋＋　耐久：C　魔力：A＋　宝具：A

次回で一応初戦闘を終わらせる予定です。

『約束と作戦』

竜兵&ａｍｐ;キャスター組　ＶＳ　準&ａｍｐ;バーサーカー組

「ハアァァアア…」
「構えても逃げれますよ、そんなもの通用しません」
「だが逃げられない、この一撃は確実に当たる……」
「本当ですかね？　もうこれほどの距離ですよ？」

最初に宝具の開放という危険性を感じ取って、相手のサーヴァントは大きく距離を取っていた。

「結局とどめは近寄らないといけないのにな、まぁ、避けさせないがな」
「良いから速く来たらどうなんですか？　もう前口上は飽きましたよ」
「ならば行くぞ、覚悟は出来てるな……」
「はいはい、来てくださいよ♪」
「『我が八極は技と魔たる術を用いて、来るべき未来の形を取る』」

俺は構える。
出来れば宝具の使用は控えたいが狂乱にはまだ余りにも速い。
令呪もこの初戦での使用は危険だ。
ならば威力も落ちているがこの宝具での一撃を持って切り抜ける。

「『その一撃は重く猛々しいもの、我が体はその動きに応える、放たれよ、完成された八極拳よ』」

そして俺は相手のサーヴァントを見据える。

あの距離から木の後ろに隠れようと、防御をしようとこの一撃はお前に避けさせはしない。

「行くぞ、『大成八極（たいせいはっきょく）』！！」

この一撃を回避しようとしても敏捷のステータスはあまり関係がない。

この宝具による攻撃に追尾性能があるわけではない。

しかし、そこはスキルである『心眼』での戦闘論理で相手がどの方向へ行くかを予測した上で放つのだ。

そしてバーサーカーの心眼のランクは（偽）がＡ－、（真）がＢと非常に高いのである。

その為、今相手のサーヴァントがどこに居るのかは見えてなくとも、ある程度把握できていた。

「きっと……そこだな、喰らえ！！」

「何で私の場所が分かったのでしょう？　くっ！！」

俺は予測していた所に速く行き、大きく踏み込んで相手へと放つ。

相手のサーヴァントもまさか宝具解放だけで、この速度に追いつかれるのは予想外だったようだ。

まぁ、相手の避けるのが遅かったのは、この技が当たる訳無いって油断していたのもあるだろうけれど。

「ラァアアアアア！！！！」

「体が耐えれば……」

今までの罵倒の怒りの分も込めてこの一撃を放つ。

相手のサーヴァントは手を交差して受け止めようとするが、宝具の一撃というのはそんなやわなものではない。

案の定相手のサーヴァントは吹き飛んで行った。
しかし疑問が吹き飛んだ後に浮かび出てきたのだ。
「いや、確かにこの一撃自体に手応えはあった、ただ惜しむらくは……」
俺の捕捉した所に間違いはない。
しかし相手のサーヴァントは最後に僅か一瞬の間に後ろへと飛びのいていた。
「どうにか耐えられました、ここで反応できたのは本当に幸運というものですね、効きましたよ」
「チッ、こいつは想像以上に悪運の強い女だ……」
俺は起き上がってきた相手のサーヴァントに舌打ちをする。
「今日の所は引き上げますよ、帰りましょうか、ご主人様♪」
起き上がっての開口一番がこれでは少しばかり拍子抜けというものだ。
今までのコイツならば十中八九プライドの面で怒るかと思ったのだが。
まぁ、その言葉を聞いて竜兵は驚いていたけどな。
もとより戦うにしても搦め手というか、奇襲というか策を用いるはずのキャスターが真っ向勝負をして、しかもそれをマスターの意向無しにやって自分の尺度で幕引き。
竜兵からすれば振り回された以外の何ものでもない。
これが自分のサーヴァントだったらかなり厄介というか気を揉むだろうな。

「仕方ねぇな……どうせ拒否させないんだろうからよ」
竜兵も半ば諦めた気持ちで相手のサーヴァントの言う事を聞く。
令呪を使って従順というか、せめてマスターの意思を尊重させるようにしたら良いんだろうけどな。
でも、そんな理由でいきなり使ったら後がしんどいよな。

「それでは再び会う日まで……私は負けませんが貴方はどうなりますかね？」

不敵な笑みを浮かべながらそんな事を言ってくる。

「そういうお前こそ俺以外にその首を譲るなよ……」

こちらとしてもそちらがそう言ってくるなら、首を叩きながらこう言い返すまでだ。
お前は記念すべき最初の敵なのだから。
平行世界の住人とは一期一会。
また出会えるかどうかなど分からない。
俺は確実にお前を倒して見せる、令呪を使うことになろうと、狂乱しようとも。

そして相手が去っていった後、俺もマスターの方へ振り向いた。

「さて……帰ろうか、マスター？」
「あぁ、帰ろうか」

俺とマスターは本拠地へと帰っていくことにした……

モロ&?組

「しまったね……」

「はい、誤算でしたね」

僕は出来ればガクトの家を本拠地にするつもりだった。

近くに寮がある以上、大和や京たちの援護を望めると思ったからだ。

しかし、ガクトの家に向かう途中にガクトを見かけた。

ガクトは女性を引き連れていたが一目見たら分かってしまうほどの雰囲気。

つまりサーヴァントだ。

ここで僕はプランを変更した。

悪く言えば臆病風が吹いたという事だ。

ガクトのサーヴァントは強いと思ったからだ。

僕は弱いからそういう強い存在の気配は敏感に分かる。

同盟もありだけどアサシンに頼んで隠密にガクトのサーヴァントを始末する手もある。

なぜならガクトは自分のサーヴァントが同盟を組むということが『弱い』と思う可能性がある。

そこで勝負になったら残念だがいきなり脱落だ。

しかし始末するにしても一応監督役には報告はしてからの方が良い、幾らなんでも不意打ちでやって後々のペナルティは嫌だからね。

僕の新しい本拠地は金曜集会で使う基地。

そこに霊体化させたアサシンを忍ばせて、僕はその間に罠を作ったり、親不孝通りでの武器集めをする。

何故武器を手に入れようかと思うと僕自身の身体能力が低いからだ。
低いといっても極端ではなく普通程度のものだけど、やはりガクトの様な筋肉質な人が相手ならば無理がある。
その為少しでも抵抗する為に必要な武器を集める事にする。
だって相手が強いものを引き連れていて自分が弱いからとバカにされるくらいなら精一杯やるしかない。

例えどんなに卑怯といわれても良い、クリスならば激昂するだろうがこれは勝負だ。
自分にどこかでこの行動の報いが返ってくるかもしれない。

でもそれと引き換えに勝てるならそんな罵倒の一つや二つくれてやる。
そして相手の願いが不純な物や破滅的な物だったら叶えずに保管する方がましというものだ。
きっとこう考えられるのは自分に具体的な願いが無いからなのだろう。

「で……宝具とかの説明してくれない？」
「主、そのかいつまんでお話しすると……模倣です」
「模倣、真似ができるってこと？」
「はい、相手の体術や気や魔力による技をコピーできます」
「なんか凄いね、それ」

この説明を聞くとかなり強い宝具だ。
相手の宝具が体術ならばランクこそ下がるが複製できる。

「しかしこの宝具に弱点はあります。それは筋力や異様な速度が必要となると模倣の錬度は著しく下がります。そしてこの宝具はアサシンには向かない乱戦ならば真価を発揮します」

まぁ、デメリットがないと面白みはないからね。
むしろそれだけで済んだのが良い。

「成る程、全サーヴァントの体術なんかを良いとこ取りできるってわけだね、そしてそのサーヴァントに対して相性の良い体術を使用すれば良い」
「『気配遮断』が失われないので良いとこ取りして後ろからやれば良いんですからね」
「でも相手が1人で十分ヤバイ奴だったら別問題って訳だよね？」
「しかしその様な『例外』は滅多に有りません、バーサーカーや三騎士といえども『気配遮断』を見抜くには運が良い、もしくは『心眼』のスキルのように勘が良くなくては出来ません」
「成る程、ただでさえ相手のサーヴァントには僕の臆病から来る逃避に加えて、千里眼のスキルで敏感に反応できるんだ、策を上手く使えばいけるかもしれないね」

僕の言葉を聞いてサーヴァントは驚いた顔を浮かべて言葉を発した。

「主、この私と組んでこの聖杯戦争に勝つ気なのか？」

僕のサーヴァントはそんな事を聞いてくる。
自分だってそんな手抜きされたら困るくせに良く聞くね。

「当然、やる以上はやらせてもらうよ、だから君の力……僕に貸してくれる？」

そう僕が言ったほんの少し微笑みを浮かべてサーヴァントが言葉を発する。

「はい、主、この力を貸しましょう、だから勝ちに……」
「いこう、それに僕は狙うべきサーヴァントはもう目星がついている」
「それは一体？」
「それはね……ランサーのサーヴァントさ」

不敵な笑みを浮かべながら僕、師岡卓也は三騎士の首を取ると確かに宣言した。
アサシンは驚いているがこれにはちゃんとした意味がある。

スキルである『戦闘続行』を持つサーヴァントは幾ら隠れて攻撃しても、高ければ完全に急所をつかないと意味がないからだ。
三騎士は可能性上持っていてもおかしくはない。
例外で持っていない可能性もあるのだろうけど、多分持っているだろう。
ランサーより出来ればアーチャーの方が良いんだけど、自分達が隠密で傷つけてアーチャーが止めを刺して、効率的にするのも悪くないから無視。
セイバーとバーサーカーは漁夫の利のため完全に放置。
だって『最優』と『最強』だもの、マスターの方も罠にかけて転んでも決してただで転ぶようなメンバーじゃあないはずだ。

そしてそこから自分達の居場所がばれては仕方が無い。
最高の手としては相手のマスターを人質にとって、令呪による自害をさせる事だ。
後味が悪いからそれは出来ればごめんこうむりたい所だけどね。

そしてそれぞれの思惑を持って動いた開幕の日の夜が明ける。
ここから更なる激戦が始まるのかどうかはまだ分からない。

『約束と作戦』（後書き）

宝具が一応出てきたので表記しておきます。

バーサーカーの宝具。

『大成八極（たいせいはっきょく）』

拳法の宝具。
魔力により強化された心眼スキルによる未来予知と、投影魔術によってなされた八極拳の完成形を放つ。

キャスターの宝具。

『止（と）まらない進化（しんか）』

同じ相手と戦うたびに僅かにステータスが上昇する。

モロと組んでいるサーヴァントの宝具。

『鏡影（きょうえい）』

一度見た相手の体術や気の技をほぼ完璧に模倣し使用することができる。
例外なく使用することはできるが筋力がないため、力を必要とする技などは劣化してしまう。

『各々の動き』

開幕から一夜明けて……

サーヴァントとマスターは各々の意思を持つ。
そのため自由に行動をしたがる奴がいれば傍で護衛をするものもいる。

キャスター、ランサー、バーサーカーを除いた残り４騎のサーヴァントの参加意思というのはまだ昨日の時点では報告されていない。

早朝、夜明け前。
カラスが支配する世界の中、親不孝通りに師岡の姿があった。

モロ＆ａｍｐ;?組

「さて……行こうか」
「主、何故こんな早くに?」
「他のサーヴァントとの鉢合わせが嫌だからね、それでこんな早くにきたって訳」
「成る程、理解しました」

そして僕は宇佐美代行センターへと入っていった。

「お早うございます」
「おいおい、こんな朝早くに参加表明かよ、オジサンもびっくりだぜ」
「良いですかね?」

「良いですかって……そりゃあお前の決めることだ参加するのか、しないのかだろ」
「します」
「で、まずそいつは何のサーヴァント？」
「えっと、その…分かりません」
「成る程ね、教えてもらっていないパターンか」
「はい、その通りです」
「じゃあサーヴァントから言ってもらうか、何のサーヴァントだ？」
「アサシンです」
「成る程、分かった。　で師岡とアサシンは参加だな？」
「はい、後一つ聞きたいことが……」
「なんだ、えこひいきは余りできないぞ？」
「その…ここらへんに武器を扱っていたり、罠の器具を取り扱っている店知りませんか？」
「それなら結構あるぞ、地図ぐらいは渡してやる、相手のサーヴァントの真名を教えるとかに比べたら微々たるもんだからな」
「有難うございます、じゃあアサシン、早速行こうか」

僕、師岡卓也はこの川神聖杯戦争を勝ち抜くための行動を開始した。

そして時は過ぎて夜も明けて朝日が差し込む時間帯。
此処にもまた行動を開始し始めたサーヴァントとマスターがいた。

竜兵＆ａｍｐ；キャスター組

「とりあえず本拠地の事は大家の奴に話つけてきたぜ」

ちなみに話は拳で解決した、その為少しだけ返り血が付いている。
しかしそんな事は日常茶飯事だから気にしない。
俺は一応本拠地にしたところでキャスターと話す。
俺の目線は下に向いている。
その理由は明白だ。

「そうですか～♪」
「ゴロゴロしてんじゃねえよ、まだ荷物が少しだけだがあるんだよ！！」

転がりながら自分から動こうともせずに寛いでいるのだ。

「頑張ってください、日当たりが良いのですやすやと……」
「眠ろうとすんなぁ！！」
「冗談ですよぉ」
「全然そういった風には見えねえなぁ！！」
「怒ったらダメですよ、か弱い乙女なんですから」
「コイツに構ってたら俺の怒りが……上手く発散しないとやばいな」
「あれ、どこに行くんですか？」
「ストレスの発散だ」
「私も一緒に行きますよ？」
「来るんじゃねえ！！」

そう言って俺はストレス発散の為に頑丈な男、もしくは良い男を探しに町へと出て行った。

狙うのはガタイが良い奴……あのハゲのサーヴァントはよかったな。
ああいった男がゴロゴロいたら俺のストレスなんて微塵もないだろうよ。
俺はため息をつきながら街中を歩いていった。

準&ｐ；バーサーカー組

「あれ、準、彼はどこに行きましたか？」
「何言ってるんだよ、若、霊体化してるだけだぜ」
「そうですか……しかし最初聞いた時は驚きましたよ。まさか『パラレルワールド』の住人とは思いませんでした」
「はじめて見るはずの若の事を知っているみたいだったし、竜兵のことも一目で分かっていたんだ、驚いたぜ」
「まあ、」
「そうだな、若のいうとおりだ」
「それで……準はもし手に入れば何を願うのですか？」
「それは、まだ決めてないな」
「なら、彼はどうですか？」
「若、彼ってバーサーカーの事か？」
「その通りです、彼なら何を望むのか…気になりませんか？」
「そうか、聞いてみるのも悪くないかもしれないな、バーサーカー出て来い！！」

しかしバーサーカーは準が呼んでも出てこない。

何故ならその頃バーサーカーは冬馬の部屋ではなく別の場所にいたからである。

「さて……あの日のようなことが有ってはいけないからな」

俺は今、病院の中を探索している。
あの平行世界での出来事を忘れてはいないからだ。
トーマの父親はトーマと準に悪事を強要しようとしていた。
この世界で救われていないならば救おう。
聖杯に託すはずの願いだが自力で出来るなら万々歳だ。
それにこのような一大事に協力してくれる人には心当たりがある。
それは……英雄だ。
英雄が幾ら多忙でもトーマの問題といって、土下座でもすればどうにかなるだろう。
という訳で俺は葵紋病院の奥の方、院長室まで進んでいった。

「……で、これが蔓延すれば……」
「院長、貴方も人が悪いですね」

俺は今、霊体化しているが言葉は聞こえている。
そして話が終わって2人が出て行った後に部屋を漁る。
今日の所は準備が無いから大人しく証拠の確認だけだ。

「で……ビンゴか、この書類はどれもこれも悪事の証拠だ」

とりあえず確認はしたし、今回はここまでにして部屋に戻るか……
部屋に戻ったらとりあえずは作戦会議だろうな。
トーマの頭脳があれば作戦や優先的に狙うサーヴァントが決まるはずだろう。
そして俺はトーマの部屋へと歩いていった。

ガクト&?組

「俺様たちもいい加減参加表明ってやつしに行こうか」
「はい、行きましょう」
「それにしてもモロの奴はどうしたんだ、俺様の電話に出やがらねえ」
「多分忙しいんじゃないですかね？」
「あいつの事だからうっかり取り忘れかもしれないな」
「で……あの人たちに助けを求めるんですか？」
「その通り、仲間は多くて損は無い！！」
「でも頼りになりますか？」
「なるな、大和や京の頭脳が有れば結構良い作戦は立てられるし、戦闘力としてもワン子やクリスが居れば問題は無い」
「へぇ……凄いんですね」
「ただ情報担当が居ないと相手の弱点が分からないってのが痛いな」
「その人がまさか……」
「モロだ、とりあえずは参加表明の後に相談しないとな」

そう言って俺様はヒゲ先生に会う為に宇佐美代行センターへと向かっていった。

亜巳&？組

「全く……使えないね、遅いから時間が掛かったじゃないか」
「すみません、動けないもので」
「あんたの場合は動かないだけだよ、入るよ」

そう言ってビルの中へと入っていった。

「ああ、6人目のマスターか、参加か？」
「ああ、そのつもりだが私みたいな奴じゃあだめとかは言わないのかい？」
「ダメとか良いとかじゃあ無いんだよな…参加するか、しないかはお前の決めることだ」
「そんなの、参加するに決まってるじゃないか」
「で、まずそいつは何のサーヴァント？」
「ん、確かそれは……」
「成る程ね、教えてもらっていないパターンか、何で教えないんだよ、多いなこのタイプ」
「だって聞く余裕が無かったからね、私も余り話してないし」
「じゃあサーヴァントから言ってもらうか、何のサーヴァントだ？」
「私はセイバーのサーヴァントです」
「成る程、分かった。　であんたとセイバーは参加だな？」
「ああ、あとひとつ私はあんたって名前じゃあない、板垣亜巳だ、覚えときな。」
「はいはい、おじさんも全部知ってるわけじゃあないからな、覚えとくよ」

そう言ってビルから出てきたときに大きな声が響いてきた。

「お姉さんじゃないか！！」

声をかけてきたのは前に見かけた体が大きく頑丈そうな男だ。
女を連れている身で私に話しかけるなんて身の程知らずだね。

ここで時間は一旦、板垣亜巳とサーヴァントが、宇佐美代行センターに着く少し前に遡る。

「これで島津とライダーの参加はＯＫだな」
「なあ、ヒゲ先生、参加しているのってどんな奴らなんだ？」
「教えねえよ、流石に今回ばかりは袖の下も無理だぜ」
「そうなのか、残念だぜ」
「ただ、今のところ参加表明をしたのはお前で５人目だな」
「へえ、もうそんな早くに表明してるんだな」
「あのな、むしろお前らが遅いんだよ。普通ならそのまま来て次の日からペナルティ考えずに戦うんだよ」
「ペナルティって？」
「一時的なステータスダウン、または令呪を一画失わせるって奴だ、特に酷いと討伐対象。ちなみに昨日は危害が無かったから良かったが有った場合はペナルティを食らう奴らが居た」
「ってそんな事があったのかよ」
「まぁ、もう過ぎた事だ、お前らも頑張れよ」

そして板垣亜巳より速く着いた島津岳人は入れ違いとなって出会ったのだった。

ここで時間を戻そうと思う。

「おや、あんたは……ようやく女でも捕まえたのかい？」
「違うぜ、この女性は……」
「ガクトさん！！」

どうやらこの男とは殆ど入れ違いだったようだね、だから多分この

女は……

「サーヴァントだね、あんた？」
「何の事ですか、私はただの女の子ですよ？」
「それにしては随分と気配が違うじゃあないか」
「それは魅力ですよ、勘違いです」
「食えないねぇ、このままやってものらりくらりとかわされそうだ」
「それでは、さようなら、お姉さん」

話を強引に切って女の方が頭を下げて去っていく。
男の方がついていっているが、私の勘ではあの女は十中八九サーヴァントだ。
自分から今回の勝負に関係しているのをばらしているけど問題は無い、夜になればあのサーヴァントを狙えば良いだろう。
私はそう思って自分のサーヴァントを引き連れてこの場から去っていった。

総理＆ａｍｐ；アーチャー組

「で……お嬢ちゃん、様子はどうだい？」
「問題はありませんが昨日のあれは一体？」
「きっとあのサーヴァントの宝具かもしれないなぁ、催眠術の一種って所だろう」
「催眠術？　あれはセイバーのはずじゃあ……」
「言い方が悪かったな、『話術による』って言葉をつけていなかった」
「話術ということは、つまり……」

「ただ話し方の上手さで他人の精神に干渉する宝具、俺のような総理にあんな力があれば良いのによ、あのサーヴァントは本当に何者なんだ？」
「サーヴァントの正体については図書館などで分かるとは思いますが、あの者は少し薄気味悪いというか、きっと０に近い確率で分からないというか……」
「まあ、特徴的なもので絞り込まないといけないよな」
「今から調べにでも行きますか？」
「善は急げ…嬢ちゃんの言うとおり即行動に移すか、とその前に参加表明だったな」

そう言って俺と嬢ちゃんは武装をしたうえで参加表明の場所へと向かった。

矢場＆ａｍｐ；ランサー組

「マスター、今日はどうしますか？」
「あの男を倒そうと思うの」
「あれでもサーヴァントですし、あの荒々しさなら無視していて良いでしょうね」
「えっ、なんでかしら？」
「あの男はきっと『バーサーカー』です、いつかは自滅するから別の相手を狙った方が良いかと」
「そうなんだ、知らなかった」
「魔力を多く取るものですからね。マスターへの負担が大きいんです」
「でもあのサーヴァントは狂ってなかったわ」
「きっと別の方法で押さえ込んでいます、スキルか宝具でしょうね」

「へえ……」
「とりあえず狙いを別の敵に定める事から始めましょう、まず優先的に狙うのは……」

そして話し合いをする間に夕焼けが落ちて夜の始まりが告げられる。

全てのマスターが狙うべきサーヴァントが決まった。

ガクト&ライダー組

「ガクトさんはどのサーヴァントを狙いますか？」
「俺としては速いやつとか、隠密を狙うな」
「さすがは大和、目の付け所が良い」
「でも一理あるのは事実ですよね、でどうしますか？」
「俺様が狙うのは……」

竜兵&キャスター組

「ご主人様、一体何を考え込んでいるんですか、そんなのは似合いませんよ」
「そんな事は分かってんだよ！！、で聞くがキャスター、どいつを潰したいんだ？」
「私が倒したいのはですね……」
「速く答えやがれ、良いな？」
「決まりました、狙うのはあのサーヴァントです、ご主人様♪」

準&バーサーカー組

「若、作戦として抜かりないんだな？」
「当然です、これならバーサーカーも異論は無いでしょう」
「ああ、流石と言わざるをえない、コイツを狙えば良いんだな？」
「はい、我々の標的は……」

亜巳&セイバー組

「豚、どうだい？」
「一応狙いに目星をつけましたがどう致しましょうか？」
「変な笑顔を浮かべんじゃないよ、一体何が言いたいんだい？」
「何って、2通りの狙い目が有るんですよ、それを聞いています」
「遅かれ早かれどちらもやるんだ、1つ目の方から行くよ」
「はい、では言います、私たちが狙うのは……」

モロ&アサシン組

「主、どうですか？」
「店主さんに教えてもらってそれなりのアレンジを加えているよ」
「でもここまで周到にやる必要は無いのでは？」
「甘いね、相手は白兵戦でも強い奴がいる、用心深く、弱い奴は弱いなりの処世術で弱さを補う、だから周到すぎるのは良いことさ」
「そこまでやるほどの相手ですかね？」
「なんたって三騎士の一人だからね、マスターも隙有らば狙おうか

と思っている」
「本当に倒すおつもりですか？」
「うん、真剣と書いてマジだよ、アサシン、あと疑問なんだけど」
「何ですか？」
「それ本当の話し方じゃないでしょ、堅苦しくしないで良いよ、そんな堅かったら勝てないかもよ、なんたって狙っているのは……」

総理＆ａｍｐ；アーチャー組

「さて、嬢ちゃん、見渡せるかい？」
「はい、良く分かります」
「じゃあ、今日は一人倒すぜ、狙う標的は事前に話し合ったからな」
「はい、覚えています、頭を狙います」
「頼もしいねえ……、さて、気合入れて標的をスコープに入れてと、悪いが勝たせてもらうぜ…」

矢場＆ａｍｐ；ランサー組

「この公園からサーヴァントの気配を感じます」
「成る程、誘っていたという訳ね」
「わざわざマスターの家から近いこの公園にサーヴァント特有の反応をさせて、おびき寄せる狙いはなんだったのかしら？」
「誘っているのは事実、そしてあのマスターは何のクラスを従えていると思う、ランサー？」
「多分、あのマスターからは意外ですが強いサーヴァントではないかと、こんな開いた場所で挑むのは余りにも大胆な行為です。まぁ、

この予想は根拠も無いし、詳しくは分かりませんが、でどのサーヴァントを狙いますか」
「じゃあ決まりね、私たちの初陣の相手は……」

『アーチャーだぜ、三騎士は無視すると痛いしロングレンジは面倒だ』
『ライダーですよ、女性枠を独り占めするための一歩として、彼女は見逃せません♪』
『セイバーが良いでしょう、最優を倒せば優勝する可能性は飛躍的にあがる』
『キャスターです、魔術師は強力な強化や策を持つので、先に倒せば良いかと』
『ランサーなんだから、最速は伊達じゃあないと思うよ』
『バーサーカーのサーヴァントさん、邪魔になるからよ、退場してくれ』
『目の前のマスターよ、アサシンだったとしたら絶対に逃がしちゃダメ、コソコソされるのは後々厄介になるわ』

全てのサーヴァントが動く、見事なまでに狙いはバラバラ。

この2日目の夜、一番先に戦いを始めるのは果たしてどこか。

そしてこの闇の中、強者を求める女性が疾走しているのを、この時はまだ誰も知らなかった。

「さあ、私を楽しませてくれる奴はどこにいるんだ！！！」

不確定要素（イレギュラー）、川神百代、参戦の時。

『各々の動き』（後書き）

次回は戦闘描写を書く予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7339y/

『第3次川神聖杯戦争』

2011年12月16日23時47分発行